

大人になった私には、彼女の家を訪問する勇気がなくなっていた。表門の前に立って、寺のいわれを刻んだ石の文字をゆっくりと読んだ。すると、彼女の母親が日傘をさして、買い物かごを持ち出て来た。昔とまったく同じ姿だった。一瞬、視線が合ったが、私は、無意識に、その母親の顔の中に彼女の面影を捜し出そうとしたのか、視線をそらさず、まっすぐと母親の顔を見た。異様を感じ取ったのか、私の方に顔をじっと向けながら、表通りに出て行った。

それが最後で、次第に私の心から彼女のことは消えて行った。時が私を変えてしまった。その後、しばらくして、私は、今の妻に知り合い、三年の交際の後、結婚し、家庭を持った。妻は私に、男の子を三人、女の子一人の合計四人の子を生んでくれた。長男は、今、丁度十五歳で、この日記を書いた、当時の私の年齢と同じである。年子で、十四歳の長女が続き、次男十二歳、三男は十歳のにぎやかな毎日である。

日記に書いてある事だけでなく、そこに書けなかった事も含めて、私の心の奥深くにしまわれ、忘れ去られていたものが、一気に扉を開けて、私の前に現れ出た。どうしても、文字に残せなかった、当時の自分の、微妙な気持ち、にわかに、私の心の中によみがえって来て、とまどいを感じるほどである。

あれから、二十五年の月日がすぎた。その日記の存在も、その心も、日常のあわただしさの中に、今日の、この日まで、私は完全に忘れていた。その日記の中に見る、ありし日の自分、少年から青年への過渡期にあった自分の、あの頃の自分の、あの純粋な気持ち、今は、全く、私は忘れてしまっている。少年の純粋な心を全く、感じることはない、冷酷な大人になってしまっている。

時計が四時をまわっていた。私は喫茶店を飛び出し、四条京阪へと急いだ。京阪電車も、疏水も、今は地下に埋まってしまっている。川端通りとなり、車の行き交いのはげしい道路になっている。四条京阪も三条京阪も、今は全く、昔の駅の面影がない。

## エビローグ